卒業式式辞

この春、社会人として広く世界に飛び立たれる卒業生、大学院修了生の皆さん、また、これから何年間か、さらなる学究の意欲に燃えて進学の道に入られる皆さん、それぞれの旅立ちにあたり、ひと言、お祝いと餞の言葉を述べたいと思います。

私たちは今、グローバル時代の名の下に人類がかつて経験したことのない状況を生きています。「ソサエティ5.0」に象徴される超スマート社会の到来、あふれかえる情報を隠れ蓑に嘘と真実の見極めがつかなくなる『ポスト真実』の時代。それらの言葉と同時に、最近、にわかにクローズアップされてきた言葉がありません。それが、「人生百年時代」。皆さんが生まれてまもない二十年少し前には現実の尺度としてなかなか思い描きにくかった一世紀の時の長さが、今や、私たちの人生の平均値となろうとしている。そうした時代の訪れを、はたして素朴に喜ぶことができるのか？　いえ、私たちに、「人生百年」を不幸と呼ぶ権利はありません。なぜならこの地球上には、私たちの三分の二にも満たない短い生命しか約束されていない貧しい地域があり、あるいは、私たちの傍らには若くして重い病に苦しんでいる人が少なからずいるのですから。ですから私たちは、「人生百年」を天の恵みととらえ、いかに豊かに生き尽くすことができるかを積極的に模索していかなくてはならないのです。それはある意味で、恵まれたものゆえに強いられるサバイバルの闘いでもあります。

さて、私は今日、この式辞で、「リアル(real)さ」ないし「リアルな共感覚」とは何かという問題を、この「人生百年」というキーワードと結びつけてお話しようと思います。そのことを決心したのは、今年の元旦、第九十五回を迎えた箱根駅伝マラソン大会を、生まれて初めてこの目で見たときのことでした。復路第八区、神奈川県戸塚中継所の近くの沿道に、私は、日本体育大学の旗を持って立っていました。なぜ、日本体育大学か、それには特別の理由はありません。応援してほしいとその場で見知らぬ学生に声をかけられ、応じただけです。私自身は、目の前を走りすぎていくすべてのランナーに向けてその旗を振って応援するつもりでいました。それにしても、沿道の人だかりは、私の予想をはるかに上回るもので、年々、箱根駅伝の人気が高まっているという噂を裏づけるものでした。やがてメガホンの声が、ランナーたちの接近をアナウンスしました。先頭を切って走ってきたのは、東海大学の小松陽平選手です。

ほんの一瞬のドラマでした。小松選手は、信じがたいスピードで目の前を駆けぬけていきました。ものの数秒、いや、ものの二秒。第八区のゴールが百メートル先にありましたから、死に物狂いだったと思います。ダイナミックな足の動き、上半身の激しい揺れ、コンクリートを抉らんばかりの鋭い擦過音、わずか二秒のリアルな出来事のなかに私は何かしら崇高な感動を覚えていました。

私は翌日から、人と会うたびに、このリアルな感動を伝え、ぜひ一度、箱根駅伝を見に行くといいと勧めたものです。では、このリアルな感覚の根源にあったものは何だったのでしょうか。嬉しいとか、悲しいとか、そういった人間のありふれた情動を超えた、芸術的ともいうべき何か。昔、本で読んだ「アハ体験（ドイツ語：Aha-Erlebnis）」というのとも、「クオリア（感覚質）」というのとも異なる、何か。皆さんもこれまでに一、二度、ある現象に接して、突如としてなまなましい物質的な実感が沸き、大きな喜びや感動に出会ったことがあるにちがいありません。しかし定義はどうあれ、現実の一瞬に、自分の心を根底から揺るがすようなダイレクトな経験に遭遇できたのは、生まれて初めてのような気がしたほどです。

さて、今年一月の終わり、私たちの大学では、大学創立三十周年を記念する事業の一環として、AIに関する国際ワークショップが開かれました。テーマは、「人工知能に意識をもたせることはできるか」というすばらしくアクチュアルなもので、海外から若い先駆的な研究者が参加していました。発表、討論、基調講演すべてが英語で行われ、文学者で科学技術の知識に疎い私自身にとっては、理解困難ながら、ただそこにいるだけで最先端の知のなんたるかを伺い知ることのできる貴重な時間でした。そしてそこでの議論に耳を傾けながら私がしきりに頭に浮かべていたのが、先ほどの小松陽平選手が私の記憶に刻みこんでくれた「リアルな共感覚」のことです。私はこの感覚を、AIにはけっして経験できない、私たち人間の生命の代替不可能性を示す最大の証と少し大げさに感じていたのですが、ワークショップでの議論は、それすら脅かされる時代の到来を示唆していました。だとしたら私たちは、どのようにして自分が人間であることを証明できるのか。それこそ、私たち人間の一人ひとりが、もっと豊かに、創造的に、喜怒哀楽を経験できる、真に人間らしい存在でなくてはならないのではないか。

そしてつい三週間ほど前のこと。私は知人夫妻に誘われ、伏見駅に近いミリオン座に足を伸ばしました。話題の映画『ボヘミアン・ラプソディ』を観るためです。英国が誇るロックグループ「クイーン」のボーカリスト、フレディ・マーキュリーの栄光と悲惨を描いた物語でした。きっと退屈するだろうと予想しながら出かけていった映画ですが、思いもかけず、フレディの歌のもつ謎めいたリアルさに魅了され、またその生きざまに胸を揺さぶられました。家に戻ってからも静かに興奮が続いていました。それではその音楽の一部を聞いてみましょう。

Mama, just killed a man, Put a gun against his head, Pulled my trigger, now he's dead. Mama, life had just begun. But now I've gone and thrown it all away. Mama, ooh,… 「ママ たった今人を殺してきたよ 彼の頭に銃を突きつけたんだ 僕が引き金を引いたら彼は死んじゃった ママ 人生は始まったばかりなのに 僕はすべてを捨ててしまった」。私のなかにある直感が働きました。その直感に対して、ネットはしっかりと回答のヒントを示してくれました。皆さんは、きっと、フランスの作家アルベール・カミュの代表的な小説『異邦人（*l'Étranger*）』を、存じだと思います。「今日、ママンが死んだ」の有名な一行ではじまる、人間存在の不条理を扱った世界的名作の一つですね。おそらく、この小説から得た感動が、フレディをしてこうした傑作を書かせる動機となったにちがいないとネットは回答していました。そしてそうした可能性があることを知ることによって私の感動は倍加し、この一曲は、想像をはるかに超えて、意味と輝きを広げていったのです。このように、どんな小さな出会いからでも、思いがけない発見や喜びが生まれる可能性があるのです。そしてこうした喜怒哀楽を無数に積み重ねていく以外、「人生百年」という気も遠くなるような人生をサバイバルすることはできません。少し飛躍するかもしれません。卒業生の皆さん、どうか、自分の若さを過信しないでください。「少年老い易く学成り難し」ではありませんが、若さというのは、人生百年のどの瞬間にも生まれては消えるもの。真の若さとは、喜怒哀楽をリアルに経験できる心の豊かさをいうのですから。しかし何より大切なのは、自分の喜怒哀楽だけでなく、友人・知人・同僚の喜怒哀楽も大事にしようとする心がけです。なぜなら、喜怒哀楽する目の前の相手は、私たちの心の未来に大きなヒントを与えてくれるかけがえのない可能性の鏡なのですから。たとえば、私をこの『ボヘミアン・ラプソディ』に誘ってくれた先ほどの知人夫妻のように。とにもかくにも自分の感動を大事にしてほしい…。

さて、皆さんが今日別れを告げる名古屋外国語大学は、今、創立三十周年という記念すべき一年を終え、この四月から新たな自立のステージに立とうとしています。まさに三十にして立つ。しかし真の「而立」は皆さんの活躍一つひとつにかかっています。皆さんの充実した人生と活躍こそが、私たちの大学の歴史を築いていくのです。どうか、私たちのこの大学に「学んだ」という誇りを、いつまでも忘れることなく生きてください。そして私たち教職員一同も、皆さんにこの大学で学べてよかった、と一生思っていただける大学であり続けるよう努力を積み重ねていきます。そして最後に、何より、皆さん一人ひとりのご健康とご成功、幸多き未来を祈って学長の式辞といたします。

二〇一九年三月二十二日

名古屋外国語大学長　亀山　郁夫